

地域住民とともに人間性豊かで 広い視野を持つ看護師を育てる



地域住民が積極的に教育プログラムに参画している
神戸市看護大学。
徹底した地域密着によって、
あらゆるニーズに応えられる看護師を育成しようとしている。
鈴木志津枝学長が目指す、未来を見据えた看護師教育とは。

神戸市看護大学 学長

鈴木志津枝

特集

Shizue Suzuki
Kobe City College
of Nursing

地域に求められた 看護大学

本学は、阪神・淡路大震災の翌年に
当たる1996年に開学しました。こ
の年に開学することは以前から決まっ
ていましたが、震災によって「開学を
中止しようか、しまいか」という岐路
に立たされました。そのとき、当時の
神戸市長が「市民の健康を守る専門職
を育成することは、神戸市の使命だ」
という方針を示してくださり、予定通
り開学の運びになったと聞いています。
そうした背景から、本学は開学当初
から、市民や地域住民の方々に貢献す
る責任と使命を負っている、という熱
い思いがベースにあります。特に初代
学長は、自立した看護師を育成するた
め、元氣な方から健康状態が厳しい方
まで、すべてのニーズに応えられる知
識、技術、人間性を備え、専門性の高
い看護師を育成することに力を注がれ
ました。そして開学から23年経った
いま、初代学長の思いを受け継いで培っ
てきたものを、いよいよ地域貢献に役
立てていこうとしています。

その取り組みの代表格とも言えるの
が、地域の方々にご参画いただき実践
している「コラボ教育」。地域住民の
皆さんに教育ボランティアとしてカリ
キュラムに加わっていただいています。
例えば、模擬患者や患者体験の語り手
となつて、講義に参加していただくな
ど。当初は、本学の所在地である神戸
市西区の方々と共同でスタートしまし
たが、それが須磨区、垂水区、北区など、
近隣地域へと口コミで広がっていきま
した。参加してくださった地域住民の
方々からは「健康への意識づけができ
た」「看護学生さんと交流できた」と喜
んでいたいただいています。

一般市民との関わりが コミュニケーション力を育てる

教育ボランティアの方々には、1年
次から4年次までの全学年を通し、演
習の中で教育に関わっていただしてい
ます。1年次や2年次は基礎的な技術
演習が中心で、3年次からは応用力や
看護実践力を身につける演習が始まり
ます。その中で、教育ボランティアの
方々は高齢者の自立についてお話しさ
れたり、病気になった経験など、貴重
な体験談を学生たちに語ってくださっ
ています。

また、患者役を務めてくださる演習
では、重症患者、軽症患者などの役割
を担っていただくことで、学生が患者
さんをアセスメントし看護援助の優先
順位をつけるといった現場さながらの
学びができます。そのほか、血圧測定
や食事介助などでも患者役の立場から
どう感じたかを率直に伝えておられま
す。

教育ボランティアの方々がすばらし
いのは、私たち教員と共に、自分たち
も看護学生を育てようという意識を持
っておられるところです。時には「学
生さんに厳しいことを言いました。で
も、必要なことだと思いましたが」と、
と、あえて仰っていただける方もいま
す。そんなふうにストレートにご指摘
くださるのは「立派な看護師になつて
ほしい」という願いがあるから。教員
が指摘するよりもずっと心に響くよう
です。

座学や実習だけでなく、こうした演
習を積み重ねることで学生はどんどん
成長します。特に4年次の学生たちを
見ていると人間としてひと回り大きく
なっていると実感します。実習や発表
を見ていると、学生としての立場だけ



学生会館



図書館

でなく、相手の立場を思いやる広い視野が身につけてきたと思うことがよくあります。

例えば、先日行われた災害看護のグループワークでは、自分の頭で考えたことだけではなく、さまざまな人にヒアリングした上で「こうした視点が重要だ」と、大学に対して提言を行うグループもありました。

1年次や2年次はどうしても自分のことだけに目がいきがちですが、教育ボランティアの方々と接するうち、他者のことを考える力やコミュニケーション力が育ちます。そしてグループのチームワークが良好になり、自然と助け合いや協力が生まれます。こうした在り方は、地域包括ケアやチーム医療に欠かせないものです。

実際の生活に触れることで患者さんへの理解が深まる

本学では、地域に役立つという視点はもちろん、看護師が地域に出ていくという視点でもカリキュラムを組んでいます。2年次の健康生活支援学実習

看護師に必要なのは「自分を知ること」

地域や学内での学びだけではなく、世界に出て学ぶ「留学」もまた、学生の人間形成に大きな影響を与えます。現在、アメリカのシアトルにあるワシントン大学、ベトナムのダナン大学と提携し、短期の海外看護学研修を行っています。

私は、留学で得られる最も大きな成

では学生が実際に地域に向き、そこで生活する方々にインタビューをしてヘルスアセスメントをしたり、小学校を訪問して栄養教育の行われ方をヒアリングするといった実践をします。それによって地域の方々が実際にどんな生活をしているか理解することができ

また、急性期病院から在宅へと移行する患者さんにどんな支援を提供できるのかなど、自分が受け持つ患者さんだけではなく、ほかの学生が受け持つ患者さんのことも含めて情報共有し、看護を考える機会を増やしていくことができます。

入院日数がどんどん短くなり患者さんの生活が見えにくくなっている時代です。そんな中、患者さんの地域での暮らしを理解している卒業生を送り出すことで、看護主体の取り組みを展開していける「自立して考えられる看護師」が増えるのではないかと考えています。

果の一つが、異文化体験を通じた「日本文化の理解」だと思っています。いったん国外に出て日本とはまったく違った文化を体験することで、日本の良さ、価値観、人とのつながりに気づくことができます。さらに言えば「自分」というものを知ることにつながるのです。

おくことで人間関係を振り返ることができる。このほか、シミュレーション教育も少しずつ充実してきています。シミュレーション教育のポイントは最新のモデル人形を使うことではなく、具体例を想定することです。入職後の現場ギャップをできるだけなくすためにも、学びと現場をつなぐ工夫が必要だと思っています。

でも重要です。なぜなら、価値観の違い患者さんや病院文化と接することが多い職業だからです。自分はどう考えるか、なぜそう考えるのかを意識して

また、本学は単科大学ですので、他学部との交流ができない、というデメリットを補うために、本学が立地する神戸・学園都市にある5大学1高専との単位互換制度を導入しています。授業だけではなく、ボランティア活動やサークルを通じて、さまざまな大学の学生と触れ合ってほしいと思います。

リエゾンの看護師育成を目指す

これからの看護は、院内だけでなく地域に広がっていくものです。看護師は、そこでコンサルテーションやコー



教育棟西館 ナイチンゲール像



PROFILE / 鈴木志津枝

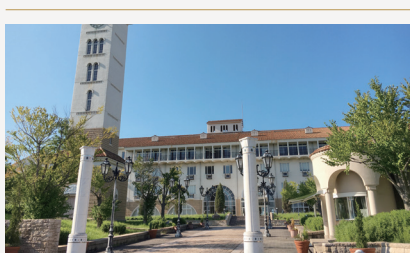
1976年、高知女子大学家政学部看護学科を卒業。兵庫医科大学病院の看護師を経て、1984年に兵庫医科大学病院の看護部長に。Oregon Health Sciences Universityで看護学の博士号を取得し、神戸市看護大学の教授、副学長を歴任し、2013年に学長に就任。

に戻ってその振り返りといったことを交互に繰り返すことで、広い視野が身につけていきます。さらに、教員にも「教育カリキュラムの中に地域の視点を組み込む」という思考が定着します。施設完結型ではなく、地域完結型の看護というものを教員自身が自覚することができるとのことです。

昨年、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」のCOCシンポジウムで、本学での学びが現場でどう役立っているのか、卒業生の発表を聞く機会がありました。卒業生たちは、急性期病院に就職することが多いのですが、学生時代に教育ボランティアと関わり地域でのヘルスアセスメントを学んだことで、患者さんの「退院したあとの生活」に意識が向くようになったと話していました。

入院日数がどんどん短くなり患者さんの生活が見えにくくなっている時代です。そんな中、患者さんの地域での暮らしを理解している卒業生を送り出すことで、看護主体の取り組みを展開していける「自立して考えられる看護師」が増えるのではないかと考えています。

本学は来年4月から法人化し、公立大学法人神戸市看護大学として新たなスタートを切ります。法人のメリットを活かせば、良いと思った教育を迅速に取り入れることができます。今後はもつと社会人教育に力を入れ、本学での人材育成と合わせて、周辺地域の看護の質を高めることに尽力していきたいと考えています。



神戸市看護大学
http://www.kobe-ccn.ac.jp

1996年4月、地域の保健・医療・福祉に貢献できる看護専門職の育成校として開学。周辺住民と連携した教育プログラムを実践し、地域とともに創っていく新たな看護教育モデルを世に示している。